ブラジルと日本の幼児の箱庭制作に見る文化的差異の起源

THE ORIGINS OF CULTURAL DIFFERENCE: SANDPLAY EXPERIMENT STUDY WITH BRAZILIAN AND JAPANESE CHILDREN

坂戸 省三^{*1}, 東野 アドリアナ^{*2}, 河内 あゆ^{*3}
Shozo SAKATO, Adriana HIGASHINO and Ayu KAWAUCHI

Adults' sandplay works gender, and cultural background releases archetypal spatial images. In this study, we will discuss when cultural difference appears and their significance. Sandplay experiments were realized with Japanese and Brazilian children and analyzed according to the direction, the position, and the order the toys were placed in the box, and how long the children played. Japanese children's sandplay works expressed a sense of unity with the surrounding world in contrast to Brazilian children's sandplay works that from an early age separate themselves from the world and had an autonomous tendency.

Keywords : Sandplay works, Cultural differences, Archetypal spatial images, Aggressivity

箱庭作品, 文化的差異, 原型的空間イメージ, 攻撃性

1. はじめに

箱庭作品は、作者個人の心的内容の側面、作者が属する文化に共通する側面、生物としてのヒトに共通する側面が相互に関連しあって成立している。これまでの研究で、成人を中心におこなった箱庭制作実験においては、性別と文化圏別によって共通する空間構成が箱庭作品に見られた。西洋文化圏、東洋文化圏を問わず大陸の文化圏の男子が作成した作品には、「男性的一元性の空間イメージ」と名づけた、一つの中心あるいは軸が全体を統合し、中心を通る垂直軸、対称性などの特徴をもつ空間構成が多数現れた。それに対して日本人男子が作成した作品は、「多元性の空間イメージ」と名づけた多元的、非対称的で水平に広がった空間構成が大多数であった。また女子においては日本人も留学生も「女性的一元性の空間イメージ」と名づけた、住人的、内部的、内包的、一元的な空間構成（後詳述）が多数を占めた。

本稿では日本人幼児とブラジル人幼児との箱庭作品および制作過程を比較することで、成人男子における文化的差異および成人女子における一見したところの共通性といったことがらの、それぞれの文化における出現の起源について考察する。すなわちブラジル人男子においては、発達の視点から、男性的一元性の空間イメージが形態的には、どのような時期に、どのような経緯をたどって現れてくるかを見てゆき、その心理・社会的背景として高い攻撃性が存在していることを分析する。またブラジル人女子においても、日本人女子と比べて、その表現のなかに高い攻撃性を内在させていることを明

らかにしていく。同時に、ブラジルと比較することで、日本人男女幼児の特質を改めて考察する。

成人男子箱庭作品における文化的差異は、ヨーロッパをはじめ大陸の文化圏の建築や庭園に多く見られる空間的特徴と、日本の建築や庭園に見られる空間的特徴とに重なるものである。本稿の考察は、こうした建築におけるいわゆる日本の表現あるいは大陸の表現といわれるものの性格に関して、心理・社会的な側面から分析し、理解するための新たな視界を開くという意義をもつ。すなわち、本稿は、そうした表現の背後にある心情の起源を幼児期にさかのぼって理解する試みである。

参考文献 1「保育園児の箱庭制作に見る人間の創作行為の起源」（以下前稿と記す）は、日本の4歳児組（4歳から5歳）および5歳児組（5歳から6歳）の保育園児を対象におこなった箱庭制作実験考察である。そこでは箱庭作品を、単純なものからより複雑なものへと大きく段階分けしたが、本稿ではブラジル人幼児においても同様の段階分けが存在し、同じ羅列的形式、同じ原型的空間イメージが現れるという共通性をまず見ていく。次いで差異性として、ブラジル人男子においては男性的一元性のイメージおよびその萌芽的状态が多数現れることや、男女ともに玩具の向き、玩具配置の空間的広がり方、制作時間などに大きな違いがあることを見、そこに成人における文化的差異の萌芽が現れていることを考察する。

箱庭制作実験は2012年の9月にブラジル、ポルト・アレグレ市のプロビンシア・デ・サン・ペドロ校でおこなった。観察者は第3筆

^{*1} 明石工業高等専門学校 名誉教授・博士(工学)

^{*2} 明石工業高等専門学校建築学科 准教授・博士(工学)

^{*3} パシフィックコンサルタンツ(株) 修士(理学)

Emeritus Prof., National Institute of Technology, Akashi College, Japan, Dr.Eng.
Assoc. Prof., Dept. of Architecture, National Institute of Technology, Akashi College, Japan, Dr.Eng.
Pacific Consultants Co., Ltd., M.Sc.

者の河内あゆである。また本稿の論考は第1筆者坂戸省三（日本人男性）と第2筆者東野アドリアナ（イタリア系ブラジル人女性）との議論に基づく（それぞれ日本文化、欧米系文化に属し、男女異なることから、相互の視点を客観視できる立場にある）。用いた箱庭セット（砂を入れた57cm×72cm×7cmの箱と、人、動物、木、花、乗り物、家具、建築物、橋、柵、兵器、積み木、その他の多様な玩具類）は日本もブラジルも同じ内容のものである。箱庭制作実験は作者に自由に作ってもらおうという仕方で行った。

2. 日本人幼児の箱庭制作における諸類型

ブラジルと日本の箱庭制作を比較するために、次に前稿で考察した日本の幼児の箱庭作品に現れる内容や空間的形式、創作行為自体の発達の展開を示す。前稿では、作品を年齢的、発達的に見ていくことで、以下のように羅列・混沌の段階、構造化の段階、および両者の中間的な部分的構造化の段階等に大きく分類した。

なお後述のTable 2、3は箱庭制作において顕著に目についたことから、特にブラジルと日本の作品を比較することで見てとれた共通性の高い性質および差異性の大きい性質の出現状況をまとめたものである^{注1)}。それら諸性質を表記したTable 2、3の項目番号を以下、項1、項2のように記す。

羅列（全51例中10例、20%）：玩具相互の関係をほとんど考慮せず、同じようなペースで玩具を次々と並べていくもの。雑然と並べるものや、写真N1-JpB5⑧（写真番号1、日本人男子、5歳児組、事例⑧、Number 1, Japanese Boy, 5 years, Case⑧の意味、写真下には制作時間9minも記入、以下ブラジル人はJpがBrに、女子はBがGとなる）のように一方向を向いているもの、N2-JpB4⑤のように箱の枠と平行に縦横に置いているものなどがある（項4に手前向き↓、奥向き↑、右向き→、縦横向き↕、囲い□など方向を記す）。女子の作品でN3-JpG4⑨のように囲い（項13）のみが現れる場合があるが、こうした作品も玩具相互には意味的関連が見られないので一種の羅列である。囲いは女性の原型的イメージである女性的一元性の

空間イメージの囲いの要素のみが先駆的に現れたものと見なせる。

日本人幼児の作品では男女とも、N4、5、6-JpG5④のように、左下から右上に向けて玩具が置かれてゆき、広がってゆくものが多かった（箱庭の中の位置を示す表記として横軸は左、中、右、縦軸は手前から奥に向かって下、中、上とする）。Table 2、3の項5～10に広がり方を示す^{注2)}。なおTable 2、3の広がり方の項5～10は最初に全体的に広がるまでの広がり方を示している。

混沌（9例、18%）：はN7-JpG4⑪のように、羅列的に玩具を置く行為が止まらなくなり、混沌とした様相を呈するもの。混沌の作品には、最初はN8-JpG4⑫-1のように、女性的一元性のイメージの一つの表れである室内空間の様相が現れはするが、玩具が次々と詰め込まれ、結局はN9-JpG4⑬-2の混沌とした状態になるものもある。

構造化（6例、12%）：箱庭全体を見て、置かれた諸玩具が何らかの意味連関の中、空間的に適切に配置されているもの。全体が明確に場や領域^{注3)}で構成されていること、またテーマのまとまりをもっていることなどが構造化の一般的特徴である。N10-JpB4⑩などがその例である。

部分的構造化（5例、10%）：羅列的、混沌的な様相のなかに構造化の要素が萌芽的に現れてくる場合もある。そうしたもののなかで、ある程度の骨格が見て取れるものを「部分的構造化」とした。また羅列・混沌に分類したが、N1、N2のように機械的、均質的に並べられたものではなく、ところどころに「場」あるいは「場的な空間^{注4)}」がある作例もあった。

テーマを見つけて構造化（2例、4%）：初めは全くの羅列であったが、突然テーマを見だし、改めて内容のあるものに作り直される作例である。

変転（11例、22%）：玩具遊びなどが次々と現れる事例や、作られた場面が次々と変化していく作例。

その他（8例、16%）：全く作らない、あるいはほとんど作らずに帰る事例。なお、変転、その他に分類したもののなかには、箱庭の箱の所まで来ずに玩具棚の前に立ちすくむ者や、またN13-JpB5③の

Fig.1 Japanese Children's Works 日本人幼児作品

Fig.2 Male Spatial Singularity 男性的一元性

ように棚の前で観察者に背中を向けて玩具遊びをする者、棚の中、棚の前で玩具構成をする者が複数いた。

構造化と原型的空間イメージ：さて前稿で明らかになった重要なことがらの一つは、幼児の作品において構造化された作品は、男女それぞれに最初から以下に述べるような普遍的、原型的な形式^{注5)}をとって現れることである。男子の場合はN10-JpB4⑩のように、鉄道、飛行機、船、工事車両のような乗り物や動物など動くものの多用（移動・侵入的）、箱の枠を超えて空間的に広がっているイメージ（外部的）、いくつかの領域が半ば独立的、半ば連続的に広がっているイメージ（多元的）である。こうした移動・侵入的、外部的、多元的という特徴をもつものを「多元性の空間イメージ」（項11）と名づけたが、参考文献2で示したように日本人男子においてこの形式はどの年齢でも多数現れる。

男子に現れる他の原型的空間イメージの一つとして「男性的一元性の空間イメージ」（項12）と名づけた形式がある。このイメージは、Fig. 2のようにさらに求心的形式と遠心的形式に分けることができる。多元的なものが中心あるいは中央の軸に集中するイメージ（求心的形式）と、中心にあるものが多元的なものをまとめ上げ、支配するイメージ（遠心的形式）である。大陸文化圏の建築および成人の箱庭作品によく見られるのは遠心的形式である。求心的形式、遠心的形式のどちらも内に強い攻撃性を秘めたイメージである。日本では小学3年生段階に求心的形式のものが、二つの戦国集団が中央付近でぶつかり合う戦いのイメージとして多数現れるが、遠心的形式の箱庭はどの年齢段階でもほとんど現れない（参考文献2）。日本人男子幼児の作品のなかで求心的男性的一元性のイメージの傾向をもつのはN11-JpB5⑮で、箱庭のあちこちで戦いが繰り返されていること、中心の火山配置にその要素を見ることができる。

女子の原型的空間イメージとしては「女性的一元性の空間イメージ」（項14）と名づけたものが最も主要なものである。参考文献4で見たように、女子の作品ではどの年齢でも人類共通に女性的一元性の空間イメージが大量に現れる。それは、住人的（人や動物が楽しげに暮らしている様子など）、内部的（箱庭の枠の中で世界が完

結しているイメージ）、内包的（全体あるいは主要な部分が囲われている—ただし内包性・囲いが現れない場合もある）、一元的（「全体として一つの空間」が中心的な位置をしめる）という特徴をもつ。N12-JpG5⑨は女子の作品で、右下の囲われた室内空間がそれにあたり、さらに全体として見ても囲われた女性的一元性の空間というふうに二重の意味でこの空間的形式をなしている^{注6)}。

なお「テーマを見つけて構造化」の作品は男女1例ずつあったが、構造化として現れるイメージは男子では多元性の空間イメージ、女子では女性的一元性の空間イメージに他ならなかった。

3. ブラジルと日本の箱庭作品における空間的形式の共通性

以下ブラジルでの作品を検討する。まずこの節では、日本の作品と同様、羅列、混沌、部分的構造化、構造化などの段階に分類ができ、年齢が上がると構造化された作品が現れること、また羅列、混沌段階では同じ空間的形式が現れ、構造化の段階では同じ原型的空間イメージが現れるという共通性を中心に見ていく。女子19名（4歳4名、5歳11名、6歳4名）、男子13名（4歳3名、5歳5名、6歳5名）である^{注7)}。

女子羅列（19例中7例37%）：N14-BrG5②、N15-BrG5⑤など計6例は、日本の作例N1、N2と同様に、玩具が箱の枠に平行に置かれたり、特定の向きに多く置かれたりする機械的配置の例である。N16-BrG4②は囲い（項13）の配置が萌芽的に見られ、機械的配置と異なる印象の作品であるが、玩具相互に意味のある関係は見られず、羅列に分類した。この作品は日本人女子に見られた囲いだけ現れるN3-JpG4⑨の作例に通じる。

女子混沌（19例中5例26%）：羅列と混沌の境界は必ずしも明確ではないが、量的に一段と多く隙間もなく詰め込まれ、最終的に無秩序な印象を与えるN18-BrG4③-2、N20-BrG5⑧-2など5例を混沌に分類した。N18は最初N17のように下半分の中央にテーブルとイス、その両側にベッドというような女性的一元性の空間としての室内空間が現れたが、結局混沌となった。これは先に示した日本のN8,9-JpG4⑩と同じ経過である。こうした女子の傾向は混沌に分類し

Fig.3 Enumeration and Chaotic Works 羅列、混沌

N21-BrB6① 16min

N22-BrB5① 11min

N23-BrB4② 56min

N24-BrB5③ 17min

Fig.4 Enumeration and Chaotic Works 羅列、混沌

N25-BrG4④ 43min

N26-BrG4④-2

N27-BrG5⑪ 25min

N28-BrG6① 34min

N29-BrG6② 30min

N30-BrG6③ 5min

N31-BrG6④ 14min

N32-BrB5⑤ 22min

N33-BrB6② 41mn

N34-BrB6③ 8mn

N35-BrB6④ 28min

N36-BrB6⑤ 16min

Fig.5 Partially Structured and Structured Works 部分的構造化と構造化

た他の2例でも見られた。なお混沌となる前段階では、N19-BrG5⑧-1がN20となったように、縦横向きや手前向きといった玩具向きをとっているものが多い(項4にはそれを記す)。

男子羅列(13例中3例23%) : N21-BrB6①は機械的な羅列であるが、N22-BrB5①と他1例は、日本人幼児の箱庭作品にも見られた、あちこちに「場的な空間」がある作例である。

男子混沌(13例中4例31%) : N23-BrB4②と他1例は詰め込むことが止まらなくなった混沌の作品である。N24-BrB5③および他1例はN23ほど混沌としていないが、混沌に分類した。

以上のように羅列、混沌の段階では、男女とも玩具が一定の向きに置かれたり、列状に並べられるといった機械的配置が多く現れることや、置くことが止まらなくなり混沌とした様相を呈するものが見れるなど、日本の箱庭作品と共通している。

次に部分的構造化、構造化の作品を検討するが、羅列・混沌段階の作品が典型的であるのに対して、この段階の作品はより個性的であるので全作品の写真を示すことにする。

女子部分的構造化(19例中4例21%) : N25-BrG4④は4歳の作品

だが、右下の柵やドアで囲われた領域(N26はそこを拡大)は寝そべる女性や本を読む少年の他数人の人物がいて、女性的一元性の空間的性格の強い領域となっている。N27-BrG5⑪は動物や乗り物など多くの玩具が手前向きとなっており羅列的傾向を残すが、左上の花が飾られ看護婦がいる領域に女性的一元性の空間の萌芽がある。N25、N27はともに一部に女性的一元性の空間様の領域がある作品である。

N28-BrG6①は上側には家々、下側には柵その他で全体的に囲われており、そうした面では女性的一元性の要素がある一方で、動物たちが向き合って対峙する、あるいは一点に集中して向き合う求心的形式の男性的一元性の要素(攻撃的要素)があちこちに見られる。N29-BrG6②は動物たちが三々五々平和なようすでつどっており、かつ右上のベッドの上ではねそべる女性と寝転がつて本を読む少年がいる。囲いの要素は右側の建物列だけであり、また羅列的傾向も残しているが、全体として女性的一元性の空間といえる。

女子構造化(19例中2例11%) : N30-BrG6③は室内空間としての女性的一元性の空間である。N31-BrG6④は左上のタワーに向かって

動物たちが集中する求心的形式の男性的一元性の空間である。

以上のように女子の部分的構造化および構造化の作品は、N31を除いて、原型的空間イメージである女性的一元性の空間としての傾向が認められる。こうしたことはブラジルも日本も共通する（Table 2、3の項14）。なおN28、N31に男性的一元性の要素があることは注目に値する。

男子部分的構造化（13例中3例23%）：N32-BrB5⑤は羅列的要素も残っているが、移動・侵入的、多元的、外部的な性格をもつ多元性の空間イメージである。N33-BrB6②は混沌の様相も呈しているが、中心に向かって多くのヘビ、カエル、動物、人間が配置された求心的男性的一元性のイメージである。女性的一元性の空間における囲いは、中の平和な空間を包み守るようにおかれるが、男性的一元性の空間における囲いは、この例のように、あたかも内部での対決的、攻撃的な圧力を高める円形競技場のよう（あるいは反対に周囲に対する城塞のように）置おかれることがある。N34-BrB6③は求心的および遠心的両方の要素をもつ（多元性の空間イメージの傾向も存在する）。求心的要素としては最初に中上に置かれたピラミッド（途中で火山に入れ替わる）、トンネルの両端で対峙的に向き合うパンダと騎馬人物、トンネル上で向き合うヘビとトカゲ、中下の求心的に向き合う騎士とドラゴン、遠心的要素は中上の大仏の他、右上滝の上に全体を睥睨するように置かれた白頭のワシである（こうした高さの表現も男性的一元性の特徴である）。

男子構造化（13例中2例15%）：N35-BrB6④は中央より下半分の猟師、刀を振りかざす海賊、トラなどによる集団（左下に戦艦も隠れている）と、上半分の戦車、騎士、ライオンなどによる軍団との対決シーンである。他にも右中の舞台では騎士が戦っている。求心的男性的一元性のイメージはしばしば二つの勢力の戦闘シーンのかたちをとるが、この作品はそれに当たる。N36-BrB6⑤は中央の大仏が全体構成を支配する遠心的男性的一元性のイメージである。

以上のように男子の部分的構造化、構造化の作品が「多元的な空間イメージ」および「男性的一元性の空間イメージ」という原型的形式をとって現れることは日本と共通する。日本では前者が大半であるのに対して、ブラジルでは後者が大半を占める（項11、12）。

その他および変転：日本では「その他」として分類した「全くあるいはほとんど作らない例」や次々と場面が変わる「変転」の例が、全51例中、それぞれ8例16%、11例22%もあったのに対して、ブラジルでその他に分類したのは、全32例中、「ほとんど作らず」にあたるN37-BrG5①、N38-BrB4①の2例のみであり、変転の例はない。N37はペンギンを右下に埋め、標識を左中に埋めておわりになった。N38はこれだけの玩具をおいておわりになった。

Fig.6 Others Works その他

4. ブラジルと日本の箱庭制作における差異とその意味の考察

ブラジルと日本では攻撃的表現および男性的一元性の空間イメー

Table 1 Comparison of Patterns Appearance Rate 出現率の比較

		攻撃性 agressivity			向き toys direction 4 ↓	空間的拡大 spread			
		1 戦い battle	2 ヘビ snake	12 男性一元性 singularity		5 左→右 L→R	6 下→上 D→U	8 上→下 U→D	9 中央→周辺 C→O
Male	Br	46 (6/13)	46 (6/13)	80 (4/5)	43 (3/7)	34 (4/13)	34 (4/13)	23 (3/13)	38 (5/13)
	Jp	50 (11/22)	23 (5/22)	22 (2/9)	17 (1/6)	65 (11/17)	59 (10/17)	0 (0/17)	6 (1/17)
Female	Br	22 (4/18)	56 (10/18)	33 (2/6)	58 (7/12)	44 (8/18)	22 (4/18)	44 (8/18)	28 (5/18)
	Jp	0 (0/24)	25 (6/24)	0 (0/4)	8 (1/13)	61 (11/18)	56 (10/18)	17 (3/18)	6 (1/18)

ジの出現率、羅列・混沌における玩具の向き、玩具を配置していく時の広がり方、制作時間において著しい差異が見られた。

Table 2、3では文化的差異が分かりやすいように、日本人には少なくブラジル人に多い内容は●のように黒塗りで表示するか、欄に網掛けをした。○はその特徴が明確に現れた場合、□は完全ではないがほとんどその状態である場合、△は低程度に現れた場合を示す。なお特に日本人幼児の場合、まったく作らずあるいはほとんど作らずに帰った者、N13-JpB5③のように棚の前に留まった者や砂箱での玩具遊びだけだった者など、表中の諸項目に該当しない場合を一を記入した^{注8)}。Table 1は差異の顕著な項の出現率をまとめたもので、左の数字は%を表し、（ ）内は出現数／母数を表す。母数は該当しない事例を除いた数である。

攻撃性：臨床心理学でいう攻撃性は、何かに向かっていくこと、自分の存在の主張、積極的に他者に接近し、関係を求めること等々の根底にある力動として広い意味で使われる。幼児の箱庭では、前稿で見たように、戦いの場面、兵器の使用、ヘビ（極彩色のヘビ）の使用、男性的一元性の空間イメージなどのかたちで現れる。戦い（項1）で○は戦闘や対峙・対決場面、□は軍艦や戦闘機等兵器（複数）使用のみを表す。ヘビ（項2）は複数あるものに○、1匹だが目立つものを1と表記している。

以下、Table 1の出現率を見ていくと、男子では、戦いに関して日本とブラジルの出現率はどちらも5割程度であるが、ヘビはブラジルが5割弱で日本の2倍ある。女子で戦いは日本では0例であるのに対してブラジル2割強、ヘビはブラジルが5割強で日本の2倍強ある。

「男性的一元性のイメージ」（項12）は攻撃性を内在させたイメージであるが、それが形をとって現れるのは構造化の進んだ段階である。部分的構造化および構造化の作品（日本では「テーマを見つけて構造化」も含む）で見ると、男性的一元性のイメージの出現率はブラジル人男子が8割で日本人男子の4倍弱ある。日本人男子の多くは多元性のイメージである。同様に女子で男性的一元性のイメージは日本では0例であるのに対して、ブラジルでは1/3の作品にその要素が見られる。以上のように攻撃性は男女ともブラジルが高い。特にブラジル人男子で男性的一元性のイメージの出現率が高い。

配置、羅列の玩具向き：羅列・混沌の作品では玩具が特定の向きに置かれたものが多い。羅列・混沌における玩具の向き（項4）を見ていくと、日本とブラジルの大きな違いはブラジルの作品では手前向きが多いことである。N21-BrB6①がその典型である。ブラジルでは男女ともに動物や乗り物といった動くものが箱の上側から下側まで手前を向いており、玩具が全体的に作者の方へ押し寄せてくるという印象のものが多数ある。また玩具を縦長の形式で並べる傾向も認められる。女子から見ていくと、N15-BrG5⑤にその傾向が強く現

Table 2 Brazilian Children's Works Analysis ブラジル人幼児の箱庭作品の分析

Brazilian Boys				4 years			
攻撃性 aggressivity	配置 placement	広がり方 spread	性別 gender	分類 classification	A 他	C 混沌	
				事例番号 case	①	②	③
				写真番号 number		23	
				制作時間 time	2	56	28
攻撃性	配置	広がり方	性別	1 戦い battle			
				2 ヘビなど snake etc.		●	●
				3 始点 start point	左上 LU	左下 LD	中下 CD
				4 羅列の玩具向き toys direction	—		⇔↑
				5 左→右 L→R	□	○	○
				6 下→上 D→U		○	□
				7 右→左 R→L			
				8 上→下 U→D	▲		
				9 中央→周辺 C→O			
				10 周囲→内 O→I			
男女差	性別	広がり方	性別	11 多多元性 spatial plurality			
				12 男性的一元性 male spatial singularity			
				13 囲い enclosure			
				14 女性的一元性 female spatial singularity	□		

- A その他 others
 B 羅列 enumeration
 C 混沌 chaotic
 D 部分的構造化 partially structured
 E 構造化 structured
 F 変転(日本のみ) ever changing
 G テーマを見つけて構造化(日本のみ) structured after finding a theme

R; right, L; left, U; up, D; down,
 O; outside, I; inside

- 求 求心的形式 centrifugal
 ●遠 遠心的形式 egocentric
 前○ 前半に○ at the beginning
 後○ 後半に○ at the end

Brazilian Girls				4 years			
攻撃性 aggressivity	配置 placement	広がり方 spread	性別 gender	分類 classification	B 羅列	C 混沌	D 部分
				事例番号 case	①	②	③
				写真番号 number	16	17,18	25,26
				制作時間 time	5	12	18
攻撃性	配置	広がり方	性別	1 戦い battle		■	
				2 ヘビなど snake etc.	1	1	
				3 始点 start point	左上 LU	右下 RD	中下 CD
				4 羅列の玩具向き toys direction	←	⇔↑	↓
				5 左→右 L→R	○		○
				6 下→上 D→U		○	□
				7 右→左 R→L		△	
				8 上→下 U→D	■		
				9 中央→周辺 C→O		●	
				10 周囲→内 O→I			
男女差	性別	広がり方	性別	11 多多元性 spatial plurality			
				12 男性的一元性 male spatial singularity			
				13 囲い enclosure		△	
				14 女性的一元性 female spatial singularity		前△	△

れている。他に N14-BrG5②、N18-BrG4③、N20-BrG5⑧など計7例にその傾向が見られた。

女子で手前向きは羅列・混沌の6割弱、男子ではN21の他にN24-BrB5③と他1例があり、手前向きは4割強ある。日本の羅列・混沌の作品中で建物や人物が手前向きに置かれる例は男女各1例ずつあるが、ブラジルのような押し寄せてくる印象のものはない。

これに関連して興味深いのは戦艦(あるいは駆逐艦)の置かれた向きである。女子では戦艦が置かれたN15-BrG5⑤、N18-BrG4③、N20-BrG5⑧の3作品とも手前向きで、男子ではN24-BrB5③、N33-BrB6②が手前向き、他1例が斜め手前、N35-BrB6④(左下にあり枠でほとんど隠れている)と他1例が右向きである。一方で日本人幼児に関しては、男子ではN1-JpB5⑧のように、戦艦が使われた4作品のうち3作品が右向き、残りが右上向きで、女子では戦艦は途中で使われてもその後に撤去された例があるだけである。つまり手前向き戦艦は男女を通じて0例である。

このように作者に対して向かってくる配置の意味はどのように解釈できるだろうか。例えば男子のN21-BrB6①からは、少し空想を飛躍させれば、戦い前の訓示をする将軍に向かって整列している軍団とでもいった情景を連想することができる。この作品は、閲兵とまではいかなくとも、整列する玩具達を作者自身が支配しているという感覚を表しているものであろう。あるいは逆に女子のN15-BrG5⑤などはN39→N40→N41のように置かれたが、これは作者に向かってくる外界の圧力、あるいは圧迫感を表していると解釈できる。男子のN24-BrB6④も同様に外界の圧力を表している可能性がある

(ただし広がり方は中央から周辺)。支配であれ、外界の圧力であれ、どちらにせよ、そこには世界と対峙的に向き合う自分という在り方が現れている。そして両者の関係は、N15、N24のような外界から圧力を受ける側が外界を支配する側に反転するとき、それはN21のような外界支配のかたちになるといえる。そして両者間の移行時点を表すものとして、男子のN35-BrB6④の上下の軍団が対峙する空間構成および女子のN31-BrG6④の左上の一点へ攻め上がるような構成の求心的男性的一元性のイメージがあると解釈することができる。そしてその移行が達成されたとき、特にブラジル人男子の場合は、N36-BrB6⑤のような攻撃性を内に秘めた遠心的男性的一元性のイメージが現れると考えられよう。こうした過程の背景には、先述のブラジル箱庭に見られる攻撃性の高さ、つまり積極的に自己主張し、世界と対峙的に関わる自分といった在り方があるといえる^{注9)}。

配置、広がり方：特に羅列・混沌の段階では玩具を機械的に置いていくことが多いので、左から右、上から下のように広がるものが多い、そうした広がり方にも日本とブラジルでは大きな差異がある。Table 1、2、3からわかるように、日本人幼児の場合、男女とも左→右(項5)、下→上(項6)が圧倒的に多い。一方ブラジルでは、男子は中央→周囲(項9)が多く、女子はN39→N41のように上→下(項8)が多い。

日本の幼児においては左下から右上に向けて広がっていくことの意味を考える上で、緘黙女児に対して行われた箱庭療法の事例^{注10)}が示唆的である。箱庭療法では左側が作者の内的世界、無意識界を、右側が外的世界、意識界を示すとされる^{注11)}。その症例では初回は

Table 3 Japanese Children's Works Analysis 日本人幼児の箱庭作品の分析

Japanese Boys				4 years Class										5 years Class																
攻撃性 aggressivity	配置 placement	広がり方 spread	性別 gender	分類 classification	A 他		F 変転		B 羅列		C 混沌		D 部分的構造化			A 他	F 変転			B 羅列		C 混沌	D 部分	G テーマ	E 構造化					
				事例番号 case	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	
				写真番号 number																										
				制作時間 time	15	—	35	57	37	53	45	21	32	42																
男女差	女性	男性	1	戦い battle	△	—	—	□	—	□	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
			2	ヘビなど snake etc.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			3	始点 start point	—	—	—	左下 LD	左中 LC	左下 LD	中中 CC	左下 LD	左下 LD	左下 LD	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			4	羅列の玩具向き toys direction	—	—	—	—	↔↑	→	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			5	左→右 L→R	—	—	—	○	○	○	—	□	△	□	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			6	下→上 D→U	—	—	—	○	—	○	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			7	右→左 R→L	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			8	上→下 U→D	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			9	中央→周辺 C→O	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			10	周囲→内 O→I	—	—	—	—	—	—	□	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			11	多元性 spatial plurality	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			12	男性的一元性 male spatial singularity	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			13	囲い enclosure	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
			14	女性的一元性 female spatial singularity	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

Japanese Girls				4 years Class																	5 years Class									
攻撃性 aggressivity	配置 placement	広がり方 spread	性別 gender	分類 classification	A 他		F 変転		B 羅列		C 混沌							D 部分	A 他	F 変転	B 羅列	G テーマ	E 構造化							
				事例番号 case	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
				写真番号 number																										
				制作時間 time	—	—	8	26	46	60	44	25	6	11	39	51	51	63	26	45	6	28	25	31	37	13	不明	56	65	50
男女差	女性	男性	1	戦い battle	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			2	ヘビなど snake etc.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			3	始点 start point	—	—	—	中中 CC	—	左下 LD	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			4	羅列の玩具向き toys direction	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			5	左→右 L→R	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			6	下→上 D→U	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			7	右→左 R→L	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			8	上→下 U→D	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			9	中央→周辺 C→O	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			10	周囲→内 O→I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			11	多元性 spatial plurality	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			12	男性的一元性 male spatial singularity	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			13	囲い enclosure	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			14	女性的一元性 female spatial singularity	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

Japanese Girls				4 years Class																	5 years Class									
攻撃性 aggressivity	配置 placement	広がり方 spread	性別 gender	分類 classification	A 他		F 変転		B 羅列		C 混沌							D 部分	A 他	F 変転	B 羅列	G テーマ	E 構造化							
				事例番号 case	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	
				写真番号 number																										
				制作時間 time	—	—	8	26	46	60	44	25	6	11	39	51	51	63	26	45	6	28	25	31	37	13	不明	56	65	50
男女差	女性	男性	1	戦い battle	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			2	ヘビなど snake etc.	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			3	始点 start point	—	—	—	中中 CC	—	左下 LD	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			4	羅列の玩具向き toys direction	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			5	左→右 L→R	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			6	下→上 D→U	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			7	右→左 R→L	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			8	上→下 U→D	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			9	中央→周辺 C→O	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			10	周囲→内 O→I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			11	多元性 spatial plurality	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			12	男性的一元性 male spatial singularity	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			13	囲い enclosure	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
			14	女性的一元性 female spatial singularity	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

Fig.7 Spread 配置、広がり方

左下隅に縮こまるように玩具が置かれただけであったが、その後右上に向けて一步步配置空間を広げてゆき、1年かけてようやく全体に広がった箱庭作品になったのである。左側は内界、右側は外界を表すと考え、この場合、少しずつ空間を広げていった作品には作者自身が投影されている。またこの過程は、セラピストに見守られ受け入れられることで次の一步の歩みが可能となったもので、いわば作者とセラピストが一緒になって、一体感の上に進められたものである。同様に左から右へと箱庭での領域を広げていった日本の幼児達の箱庭作品は、彼らを取り巻く世界（箱庭観察者および保育園、家庭など）に受け入れられ、支えられて一步步を踏み出していることを自ずと表していると考えられよう。つまりこうした日本人の箱庭作品は幼児と取り巻く世界との一体的傾向を示している

と解釈することが可能である。

一方でブラジルの並べ方の意味はどのように解釈できるだろうか。Table 2 のブラジル人男子を見ていくと、最も低年齢の4歳では3人のうち2人が左下→右上（項5、6）である。これは上記日本人の傾向と同じである。しかし5歳児5名と6歳の羅列の1名の計6人を見ると5名が中央→周辺（項9）へと広がっている。例えばN21-BrB6①はN42→N43→N44のように広がった。これらの羅列的な表現において中央から置き始めるといふかたちで、中心をもつ男性的一元性の空間イメージの性質が先駆的に現れていると解釈できる。それは、日本人幼児に見られるように箱のなかで少しずつ外界に向かって空間を広げていくのではなく、まず中央部分を押さえることで、最初から箱の中の空間全体を支配しているということを意味すると考えられる。6歳のこの作者以外の4人の作品は構造化の段階へと進んだものだが、全てが求心的あるいは遠心的な男性的一元性の空間イメージの要素をもつ（動物や人物の対峙 N33-BrB6②、N34-BrB6③、軍団の対峙 N35-BrB6④といった求心的形態、大仏による遠心的形式 N36-BrB6⑤。なお求心的形式は外界への進撃のイメージ、遠心的形式は外界での自律のイメージ）。つまり5歳段階での羅列における中央から置くという男性的一元性の先駆から、6歳での男性的一元性の空間イメージ成立へと進んでいくのである。参考文献5で示したようにヨーロッパを始め大陸の諸文明に属する男子の箱庭には男性的一元性の空間イメージが多いが、その起源は、今見たように、すでに幼児段階にあるといえるだろう。

ブラジル人女子においては5歳の羅列・混沌段階の9人の内5人

が、先述の N39→N40→N41 のように上→下（項 8）へと置いていった^{注12)}。また残り 4 人のうち 3 人が中央から周辺である。これは何を意味しているのであろうか。女子において最初に現れ、また最も一般的な原型的空間イメージは女性的一元性の空間イメージである。それは N12-JpG5⑨、N30-BrG6③の囲いが端的に示すように囲われた領域、空間という性質をもつ。そして上辺から下に向かって並べていくことは、箱の中の空間全体を最初から領有するということを意味すると解釈可能である。それはブラジル人男子が中心を押さえることで、最初から箱の中の空間全体を支配するということと対をなすものと考えられよう。日本人幼児が左（内界）から右（外界）へ一步一步空間を広げていくのとは対照的に、これらの事実はブラジル人幼児においては男女とも早い段階から箱の空間全体をわがものにして示唆している。日本の左から右への広がり世界との一体感を表しているのと反対である。すなわちブラジルの並べ方は自律的、分離的傾向を表すといつてよいであろう。これはブラジルの手前向きの多さから分析した「世界と対峙的な在り方」と同じ結論である。

周囲から（項 10）は日本、ブラジルを問わず、女子では女性的一元性の空間にともなう囲いを最初につくることと対応している。男子では男性的一元性のイメージで、周辺から中央に向かって構成されていく場合が多い。

配置、始点：始点（項 3）は最初に置かれた玩具の位置を示す。ブラジルでは男女ともに早い段階から箱の空間全体をわがものにしていくが、そのことをより端的に示しているのが始点^{注13)}を示した Fig.8 である。この図でブラジルと日本の違いは一目瞭然である（Table 2、3 の項 3 始点では日本人に多い左下、左中、中下以外を網掛けにした）。日本人で左下箱外は、作らずに帰ったか、棚の前に留まった人数を表す。なお砂箱での玩具遊びだけなどは、どこから始まったとも言えないのでカウントしていない。

日本人男子を見てみると 4 歳児組は左下が圧倒的で、5 歳児組になると右や上がいくらか増える。しかし右中、中上、右上は皆無である。日本人女子もおおよそそうした傾向がうかがえるが、女子で左上が多いのは、女子は先述のように領域を囲うという傾向があるためと考えられる（左上 5 人、右上 1 人は全て囲いを作っている）。そしてその傾向はブラジル人女子でより顕著である。ブラジル人男子を見ると、4 歳児は左下、中下、左上各 1 人だが、5 歳児では中中

が 2 人で、一番多くなり、6 歳児になると中中および右側、上側に偏る。ブラジル人女子の年齢の変遷も男子と似た傾向を示すが、男子ほど右上の方向への移行は強くない^{注14)}。日本では、作らず帰る幼児あるいは棚の所に留まり砂箱に作らない幼児（N13-JpB5③など）、いわば箱の左下まで行けない幼児が男子で 25 人中 5 人、女子で 26 人中 3 人いる。一方ブラジルでは 0 人である。箱庭の右側は外界を表すが、以上のことから積極的、攻撃的に外界へと向かっていく力はブラジル人の方が強いことがわかる。そしてその力は年齢が上がるにつれてさらに強くなる。

制作時間：日本人は男女とも積極性、外向性などの傾向はブラジル人より弱い、日本人幼児の場合、ひとたび作り始めると圧倒的な熱心さを発揮する。Fig.9 は作らずに帰った者、ほとんど作らずに帰った者を除いた幼児の制作時間の分布を表したものである。ブラジルでは男女とも 10 分以上～20 分未満が最も多いのに対して、日本の場合、男子は 30 分以上～40 分未満が最も多く、女子は 50 分以上が最も多い。30 分以上は日本では男子 21 人中 16 人（76%）、女子 23 人中 13 人（57%）を占めるのに対して、ブラジルでは男子 13 人中 2 人（15%）、女子 18 人中 2 人（11%）である。平均時間を比べると日本の男子 36 分、女子 35 分（男女計 36 分）、ブラジルの男子 22 分、女子 19 分（男女計 20 分）となる。

前稿で紹介したように、日本の場合「箱庭、楽しい」と言いながら作ったり、45 分かけて玩具を詰め込んだ後、さらに「もう一回する」と言ったりと、箱庭制作を遊びとして楽しんで夢中になっている様子が見ええる。一方ブラジルの場合、日本人のように遊ばずに、「課題としてとらえている」という印象を受けた^{注15)}。「自分の遊び」としてではなく「課題」として捉えること自体、外界と自分との分離を示すと解釈可能である。

なお日本では箱庭の場面が次々と変わっていく「変転」および「テーマを見つけて構造化」が全事例 51 例中計 13 例（25%）あるが、ブラジルではない。これは早い段階で制作が終わり、次々と変転していくという事態が起きないためと考えられる。このような日本人幼児の特徴は、日本人一般の制作等の行為に見られる丁寧さ、勤勉さなどの起源である可能性がある。

5. 結語

原型的空間イメージ出現という共通性：前稿では、日本人幼児において構造化された箱庭作品が現れるときに、男子では多元性の空間イメージおよび男性的一元性の空間イメージ、女子では女性的一元性の空間イメージをとって現れることや、参考文献 3 で考察したように生物学的由来をもつものであることから^{注16)}、それらを原型的空間イメージであるとした。そして、それらが原型的空間イメー

Fig.8 Toys Placement Start Point 始点

Fig.9 Execution Time 制作時間

ジであるならば、日本人幼児ばかりでなく、どこの国の幼児にも現れるはずである。今回、ブラジル人幼児の箱庭作品においても構造化は同じ原型的空間イメージとして現れたことから、こうした仮説は再確認されたと言える。

また日本とブラジルの男女幼児に共通して現れた羅列における同形式の秩序化の作用も、人間の認識作用における原型的なものと考えられることができるだろう。

箱庭作品における文化的差異と建築的表現：ブラジルでは攻撃性を表す表現が日本と比較して高い頻度で現れた。部分的構造化および構造化の段階で、ブラジル人男子では男性的一元性の空間が 5 例中 4 例であるのに対して、日本人男子では 9 例中 8 例が多元性の空間に分類できた。同段階で女子ではブラジル 6 例中 2 例、日本 4 例中 0 例が男性的一元性の要素をもっていた。それは特に目立つ違いではないが^{注17)}、ブラジルでは日本と比較して男女ともに、Table2、3 の戦い、ヘビ、始点、羅列の玩具向き、玩具配置の広がり方の各項目で攻撃性の高さが認められた。

さて森田慶一は建築における日本的表現の性格に関して、西洋建築に見られる自己顕示型の記念的表現とは対蹠的な自己抑制的な性格であると指摘する。また伊勢神宮の諸社殿に見られる晴朗、爽快な気分は、ギリシャ建築に見るような理知的な明晰さとは質を異にし、日本建築の明亮性はむしろ情緒的であるともいう^{注18)}。

森田のこうした見解と対応すると考えられる現象を、すでに幼児の段階でのブラジルと日本の箱庭作品のなかに認めることができる。すなわち記念的、自己顕示的表現とは、一つの中心が全体を支配する、左右対称的、垂直的、攻撃的な男性的一元性のイメージに他ならないが、そうした傾向はブラジルでは幼児段階の特に男子箱庭作品にはっきりと現れているのである。一方、日本的表現が自己抑制的であることに対応するのは、まさに本稿で分析した攻撃性の低さと言える。森田は日本的造形には非対称性が顕著なことを指摘するが、それは多元性の空間イメージの基本的性格に他ならない。

森田が指摘する日本的表現の情緒的性格の起源も幼児の箱庭作品に読みとることができる。それは日本人幼児の男女とも大多数が左から玩具を置き始める点である。左側が内的世界、無意識界を、右側が外的世界、意識界を示すとされるが、箱庭療法的心理分析を用いれば、左側から始まるということは、無意識的、情緒的な内界とのつながりが強いことを表していると解釈できる。また日本人幼児がブラジル人幼児と比べて箱庭制作を楽しみ、平均で 2 倍近い長時間遊ぶという事実は、遊ぶという行為自体が無意識的力動の発露であることを考えれば、これもまた無意識的、情緒的な内界とのつながりの強さを示すと考えられるのである。

むろん日本人にも相応に自己顕示的な個人は存在するが、成人を含めて多くの箱庭作品から明らかなように、日本人の一般的傾向として情緒的な晴朗・明亮さ、穏やかで、非自己顕示的な表現に対する好みが存在すると考えてもよいであろう。

文化的差異の要因：筆者らはこれまでの研究考察により、ブラジルと日本の文化的差異は大きく捉えれば欧米と日本の違いと考えている。箱庭制作に関してブラジルと日本では幼児段階ですでに顕著な差が現れていたが、この差は子供に対する大人の姿勢の差、特に育児法、乳幼児と母親の関係の差などに関連している可能性がある。日系アメリカ人の人類学者ハルミ・ペフは、日本とアメリカの母親

と乳児の関係、すなわち日本の育児法とアメリカの育児法の間には大きな違いがあることを指摘する^{注19)}。一例をあげると、アメリカでは多くの場合、生後数週間で乳児を一人寝させ、また授乳は乳児が空腹で泣こうとも時間に従っておこなわれる。一方日本では子供が眠ってしまうまで母親が添い寝し、授乳に関しては、ほしがるときに授乳するのが日本の伝統的な方法である。ペフはアメリカ的育児による情緒的独立は、個人主義イデオロギーに象徴される社会での独立の心理的な支えとして働いているとする。

子供と彼をとり巻く世界との関係に関して、フランス人地理学者オギュスタン・ペルクは類似の内容を次のようにまとめている。フランスと日本の大人の子供に対する姿勢の違いとして、「フランスの子どもは、大人の世界に慣れなくてはならない。自分たちも参加できるまで、押しつけられるものを甘受しなくてはならない。逆に日本では、まさに子どもがまだ社会での役割をしらないが故に、大人の社会が子どもの意思におとなしく従うのである^{注20)}」と書く。このような欧米で共通する大人の子供に対する姿勢と、外界から受ける圧力を表していると解釈した、玩具が作者に向かって押し寄せてくる N15-BrG5⑤などの作品は関連していると推測できる^{注21)}。

それぞれの文化における育児法や子供に対する姿勢などは歴史のなかに培われたものである。ブラジルひいては欧米における子供に対する一般的姿勢は、社会的な攻撃的緊張の高さと対応するかたちで、歴史のなかで習慣として成立してきたものであろう。そしてそれらは今回のブラジルと日本の箱庭制作実験において顕著に現れた差異の一つの要因といえるだろう。

欧米および日本の母親と乳児の関係や、広く大人の子供に対する関係は、ブラジル幼児の自律性に対する日本人幼児の外界との一体感として分析したことがらの由来を示すものであろう。同時に、ブラジルと比較することで日本人幼児の箱庭作品に見てとれた空間的形式、玩具の向き、広がり方の方向などの具体的な現れ方は、幼児期以降、個人の外部世界に対する基本的在り方、日本人の世界観、社会関係に見られる特徴を再考するための新たな視点を与えるものとなると考える。

参考文献

- 1) Sakato, S., Kawauchi, A. and Higashino, A.: Research on Human Inventiveness Origins through Kindergarten Children's Sandplay Works, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 81, No. 723, pp. 1227-1237, 2016. 5 (in Japanese)
坂戸省三, 河内あゆ, 東野アドリアナ: 保育園児の箱庭制作に見る人間の創作行為の起源, 日本建築学会計画系論文集, 第 81 巻, 第 723 号, pp. 1227-1237, 2016. 5
- 2) Sakato, S.: Development of Spatial Representations by Male and Female, Study on the Organizations of Images of Space in the Life Cycle Part 2, Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering (Transactions of AIJ), No. 377, pp. 97-105, 1987. 7 (in Japanese)
坂戸省三: 男女それぞれにおける空間性の発達過程, —ライフ・サイクルと空間のイメージ構成に関する研究 第 2 報—, 日本建築学会計画系論文報告集, 第 377 号, pp. 97-105, 1987. 7
- 3) Sakato, S.: Biological Basis of the Spatialities in Human, Study on the Organizations of Images of Space in the Life Cycle Part 5, Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering (Transactions of AIJ), No. 435, pp. 127-136, 1992.5 (in Japanese)
坂戸省三: 人間における諸空間性の生物学的基盤について, —ライフ・サイクルと空間のイメージ構成に関する研究 第 5 報—, 日本建築学会計画系論文報告集, 第 435 号, pp. 127-136, 1992. 5

- 4) Sakato, S.: A Study on the Species-specific Patterns of Spatial Images in the Sand-play-constructions by Female, Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering (Transactions of AIJ), No. 560, pp. 297-304, 2002. 10 (in Japanese)
坂戸省三: 女性の箱庭作品において人類共通に見られる空間イメージとその特徴について, 日本建築学会計画系論文集, 第 560 号, pp. 297-304, 2002. 10
- 5) Sakato, S.: A Study on the Common Spatial Characteristics in the Sandplay –constructions by Male of the Countries under the Influence of Continental Cultures and their *IMAGO MUNDI*, Psycho-social analysis on the cultural difference of spatial images Part4, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No. 572, pp. 185-192, 2003. 10 (in Japanese)
坂戸省三: 大陸文化圏男子被験者の箱庭作品に共通して現れる空間的特徴と彼らの世界像について –空間イメージの文化的差異に関する心理・社会的分析 その 4–, 日本建築学会計画系論文集, 第 572 号, pp. 185-192, 2003. 10
- 6) Kawai, Hayao: Hakoniwa-ryouhou Nyuumon, Seishinshobou, 1969 (in Japanese)
河合隼雄編: 箱庭療法入門, 誠信書房, 1969
- 7) Morita, Keiichi: Kenchikuron, Tokai University Press, 1978 (in Japanese)
森田慶一: 建築論: 東海大学出版会, 1978
- 8) Befu, Harumi: Japan: An Anthropological Introduction, San Francisco, Chandler Publishing Co., 1971
ハルミ・ベフ, 栗田泰之訳: 日本 –文化人類学入門–, 社会思想社, 1977
- 9) Berque, Augustin: Vivre l'espace au Japon, Presses Universitaires de France, 1982
オギュスタン・ベルク, 宮原信訳: 空間の日本文化, 筑摩書房, 1985

注

- 注 1) Table 3 の分類および事例の順 (事例番号) は前稿の表 1 と同じである。なお日本人幼児は 4 歳児組 (4 歳から 5 歳)、5 歳児組 (5 歳から 6 歳) というように分けて年齢は記録していない。一方ブラジルでは被験者の年齢のみの記録となった。
- 注 2) 左下から右上に広がっていくといってもいくつもの仕方がある。例えば、左下から右に向かって列状に置いてゆき、右端まで達すると 2 列目が左端から始まるという具合に、おおよそ列状に進んでいくもの、また同様に列状に広がるが、左下から左上にゆき、2 列目がまた左下から始まるもの、あるいは列状ではなく、空間的に徐々に左下から右上に広がっていくものなどである。
- 注 3) 玩具の意味のあるままとりのうち、狭いものを「場」、比較的広いものを「領域」と名づけた。
- 注 4) 場とまで言えないものの、動物や兵隊などの同種の玩具がまとめておいてあったり、隙間の空間で小さな広場のような観を呈したところ。
- 注 5) 原型的空間イメージは、参考文献 3 で示したように、生物学的な基盤に由来するものである。前報で見たように構造化された作品は最初からいきなりそのような完成された形式をとって現れてくるということから、人間の世界認識において、そこにしかるべき様々な内容が盛り込まれるひな型であると結論づけた。
- 注 6) その他、20 代前半を中心とした若い女性に世界共通に頻出する「二つの世界」と呼び慣わされる、川などで全体が二つの領域に分かれたイメー

ジも原型的空間イメージの一つである (参考文献 4)。

- 注 7) 時間的都合でブラジル側担当者が制作を急がせた例が男子 4 例、女子 3 例あるが、それらは考察から除外した。その他にも幼児年齢以外に 7 歳から 10 歳までの女子 6 名、男子 2 名に実験をおこなった。
- 注 8) 例えば項 1、2 に関して、作らずに帰った者は一となるが、棚前や砂箱で玩具遊びをした者はそこに記入するか空欄となる。このように事例により記入箇所が異なる。
- 注 9) N35-BrB6④は「上下の」2 軍団の対決場面であることが注目に値する。日本では参考文献 2 で小学 3 年生男子では戦いの場面が多数を占めることを述べたが、それらは左右の軍団の衝突場面で、上下のものはなかったのである。
- 注 10) 参考文献 6, pp. 94-103。
- 注 11) 前掲書。p. 35
- 注 12) 上から下への傾向は女性的一元性の空間イメージとしてはっきりと構造化された 7 歳から 10 歳の女子の作品にも引き続いて見られた。
- 注 13) 例えば写真 42→43→44-BrB6①は空間的広がり方としては、項 10 中央→周辺と分類した通りであるが、始点は中中ではなく右中である。つまり項 3 と項 10 必ずしも一致しない。
- 注 14) 7 歳以上の男子 2 名は右上のみ、7 歳以上の女子でも右上が現れ、6 名のうち 2 名が右上、3 名が左上、1 名が左下であった。
- 注 15) 前稿で日本では、砂をかき混ぜる、玩具を砂にめり込ます、上から砂をかけるなどの単純な砂遊びが 4 割ほどの園児に現れ、その感触を通してリラックスし、遊びが誘発されることを示したが、ブラジルではそうした単純な砂遊びは全く現れていない。
- 注 16) 参考文献 3 では男性的一元性のイメージについて言及しなかったが、それは「多元的」なものを「一つの中心」が力だまめ上げるイメージである。そして一頭のオスが複数のメスを力でもって支配するゴリラなどの「単雄群」のイメージと重なる。男性的一元性のイメージと単雄群とは、生物学的に見て、雄の競争的、攻撃的性質が強化されたものとしての共通性をもつ。
- 注 17) ブラジル人女子の 7 歳から 10 歳までの年長者の 6 作品はすべて構造化されたものであったが、5 作品は明確な女性的一元性の空間であった。そしてそのうちの 3 作品には強い攻撃性をもつ求心的男性的一元性のイメージがはめ込まれていた。参考文献 2 で検討した日本人女子の小学 3 年生の作品にも 6 年生の作品にもそうしたものはない。成人女子の作品は日本も諸外国ともに女性的一元性の空間イメージが多く、一見同じように見えるが、ブラジル人女子幼児における攻撃性の高さ、年長者作品における男性的一元性のイメージを内蔵させた女性的一元性の空間イメージの多さを見ると、成人女性の作品にも攻撃性の高さが潜在している可能性が考えられる。
- 注 18) 参考文献 7, pp. 147-157
- 注 19) ハルミ・ベフによる記述は参考文献 8 の pp. 227-238 による。
- 注 20) 参考文献 9, p. 52
- 注 21) 欧米人は子供に対して毅然とした態度をとる一方で、それを補償するかのよう、日本人と比較して、強く、はっきりと言語的、身体的に肯定的感情、愛情を表現しているといえる。

THE ORIGINS OF CULTURAL DIFFERENCE: SANDPLAY EXPERIMENT STUDY WITH BRAZILIAN AND JAPANESE CHILDREN

Shozo SAKATO ^{*1}, *Adriana HIGASHINO* ^{*2} and *Ayu KAWAUCHI* ^{*3}

^{*1} Emeritus Prof., National Institute of Technology, Akashi College, Japan, Dr.Eng.

^{*2} Assoc. Prof., Dept. of Architecture, National Institute of Technology, Akashi College, Japan, Dr.Eng.

^{*3} Pacific Consultants Co., Ltd., M.Sc.

In this study, through sandplay experiments realized with Japanese and Brazilian children, we will discuss when, from the developmental point of view, the cultural difference appears and their significance.

In previous researches, sandplay works showed several archetypical spatial images. The image named as male spatial singularity has a center axis that integrates all the elements in the sandplay box. It has a vertical axis passing through the center and is usually symmetrical. This type of image often occurred in the works of male subjects with a continental origin, with Western or Eastern cultural background. The image named as spatial plurality shows an asymmetric and a horizontal spread of the toys in the box, and appeared in the works of Japanese male subjects. The image named female spatial singularity has the whole spatial organization centered around a determined space. Inclusion, enclosure, and intimacy are the main characteristic of this type of spatial structure, which appeared in the works of female subjects in general, independent of their nationality or cultural background.

In this experiment, we compared the sandplay works of Japanese and Brazilian kindergarten children. We analyzed the works according to the direction, the position, and the order the children placed the toys in the box, and how long the children played. Japanese children took longer (average play time 36min) and eagerly enjoyed playing with the sandbox and toys than the Brazilian children (average play time 20min). All children's works showed a scale from chaotic, enumeration, partially structured arrangement, to a structured arrangement in the way the children placed the toys in the box. The structured works had archetypical spatial images: male spatial singularity and spatial plurality in boys' works and female spatial singularity in girls' works.

Most Japanese children started placing the toys from the left side (inner world) and spread the toys gradually to the right side (outer world). In contrast, Brazilian children from the early age of 5 years placed the toys from the center of the box to the outside (boys) and from top to bottom (girls). Brazilian children showed domination of the space in the box in whole, proactively, aggressively expressed their ego, and showed a strong force pushing to the outer world. Brazilian children's works presented a higher level of aggressivity in the placement of the toys. Also, compared with Japanese children a more significant number of Brazilian boys' sandplay works showed the typical characteristics of male spatial singularity, which express male aggressiveness. Japanese children sandplay works revealed a sense of unity with the surrounding world in contrast to Brazilian children that from an early age separate themselves from the world and had an autonomous tendency.

In resume, Brazilian boys from an early age showed in their sandplay works the male spatial singularity, archetypical spatial image of male adults with a continental cultural background. Brazilian girls also showed the archetypical female spatial singularity, but there were aggressiveness traits on the way of placing the toys. Japanese children sandplay works indicate a sense of unity with the outside world in contrast to the autonomy of Brazilian children, which were raised in a more hostile environment. The appearance of archetypical spatial images at an earlier age in Brazilian children's sandplay works confirms that the relationship with the outside world has an impact on individuals from the early childhood.

(2017 年 8 月 25 日原稿受理, 2018 年 5 月 14 日採用決定)